シリア・パルミラに関わって 33 年、その軌跡

西藤 清秀*

Thirty-three Years of Involvement in Palmyra, Syria

Kiyohide SAITO

本稿は 2023 年 11 月 4 日（土）、対面形式にて開催された日本西アジア考古学会『パイオニアセミナー』の記録をもとに、編集委員会が編集したものです。

『西アジア考古学』25 号編集委員会

橿原考古学研究所の西藤です。タイトルは「シリア・パルミラに関わって 33 年、その軌跡」としました。この 33 年間パルミラ（Palmyra）遺跡に関わってきましたけど、私の考古学人生について、一度皆さんに紹介したほうがいいと思いました。そうすると 33 年プラス 20 年の 53 年にわたる私の考古学の軌跡をお話しさせていただきます。

1972 年、「あさま山荘事件」が起きたその年に、関西大学に入学しました。そのとき関西大学は高松塚古墳を発掘調査していました。入学してすぐに考古学研究室の門を叩きますと、人手が足りないというので高松塚古墳の発掘調査に参加することになりました。結局、中の壁画は見せてもらえず、周りのトレンチの発掘と古墳周辺の測量ばかりしていました。けれども、大学に入って有名な遺跡に関わることができたのは非常にうれしかったです。ましてや、それから二十数年後にシリアでも調査をして、今もそういうところに関わることになるとは、そのときは夢にも思っていませんでした。いろいろな方々にお会いでき、今も研究者の端くれとして考古学をやらせてもらっているのはありがたい限りです。

日本の土器編年では、竹の節を割ったような図がよく見受けられます。一方、欧米の編年には、いわゆるセリエーションと呼ばれるものが使われます。私の家では、古いお茶碗とかそういうものを儀式で使っていました。日本の編年は小林行雄とか佐原真が、小さい面積を発掘して、土器のタイプを分けて組み立て、それが今日の伝統となっています。けれども、実際に古い家では狭い範囲の中にいろいろな器が含まれていることを実感として知っていたので、日本の編年って使えるのかなと思っていました。

有名な考古学者から「土器を読めない考古学者は、文献を読めない文献学者だ」と言われたことがあります。「もう、こんなものやってられるか」と頭にきていたときに、アメリカ考古学に出会えたことが私にとって人生を大きく変えるきっかけとなりました。80 年代始めにアリゾナ大学へ行きました。新しい考古学の方法や理論を考えるのが好きな大学で、民族・民俗資料や現代の物質を使って、従来の考古学の方法について研究もしていました。そこでウィリアム・ロングエーカー（William Longacre）に師事したことが私の人生にとっては非常に良かった。

考古学って何だというのを考えるときに、辞書には「考古学とは過去の人類の物質的遺物を資料として、人類の過去を研究する学問である」と定義されています。そう言いながらもいろいろな社会的背景を学問として研究する分野でもあります。考古学が対象とする時間は、時代の流れの中で変わってきています。日本の考古学で言えば、最初は奈良時代くらいまでで、それよりも新しい時代は対象にしていませんでした。日本の高度成長に伴って社会インフラ整備がされていく中で、上から掘っていくと、昭和も含めて新しい時代から古い時代まで発掘調査して、報告しなければならないということになりました。現在では世界遺産に登録された原爆ドームなどの戦争遺跡、空港、塹壕も歴史的な遺産として扱われるようになっています。考古学が扱う時間は現代史にまで及んできているのです。

私は民族・民俗資料や現代の物質資料を用いて、方法論や解釈を検証しようとする民族考古学（Ethnoarcheology）という分野に非常に興味を持つようになりました。私の中に考古学とは、時間には関係なく、人間社会と物質文化との関わりを復元する学問であるという認識が生まれていたのです。例えば、この場にいる皆さんが何かの災害で、土の中に埋まってしまったときに、皆さんの姿を復元することも考古学の研究になるのです。壇上で喋っている西藤という者が眼鏡をかけていたとか、その眼鏡は近眼用で老眼用ではなかったとか、そのようなことが復元できれば、考古学の方法というのは成立するのではないかと考えていました。

私がアメリカのアリゾナ大学に入学したとき、「ツーソン・ガーベッジ・プロジェクト」（Tucson

*奈良県立橿原考古学研究所
Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture

西アジア考古学　第 25 号　2024 年　113-121 頁　© 日本西アジア考古学会

Garbage Project）という研究分野がありました。これはウィリアム・ラスジェ（William Rathje）というマヤ考古学の研究者が大きなゴミの遺構を調査していたときに、このようなゴミをどのように考えるべきなのかという疑問から始まりました。彼は現代のゴミを人間行動の中に位置付けることができる方法を考え、ツーソン市当局と話し合いました。そして、いろいろな家からゴミを所得別に収集して、どういう人たちがどういうゴミを廃棄しているのか調べるプロジェクトを 1973 年から始めたのです。私もこのプロジェクトに参加しました。当然プライベートな手紙とかそういうものは開けたり、読んだりすることはしませんでした。そういう点で規律はきちっと守られていました。

一方、私の先生のウィリアム・ロングエーカーは、その当時、エスノアーケオロジーの一番先頭を走っていた先生で、フィリピンで土器を長い間、調査していました。ちょうど私がアリゾナ大学に滞在していた 1981 年から 1982 年にかけてフィリピンの情勢が悪くなり、私たちはフィリピンへ行くことができませんでした。たぶんそのときにフィリピンに行っていたら、私は今ここで喋ることができていたかわからないと思います。

土器研究というのは、先ほど言った類型学とか編年、文様の分野に力が注がれていたのですが、ウィリアム・ロングエーカー先生がアリゾナ大学に持ち帰ったたくさんの土器だけではなく、家や水田の図面も持っていたので、私はそれを計測して人間社会や経済的局面が土器にどう反映するか研究してみました。

フィリピンのカリンガという村には、水田と高床の家があり、これらは一応、財産として認識されていました。土器は、大きい小さいとかで違う名前がつけられていました。土器が社会や家族とどのように関わっているのか調べました。相関関係を求める式の中に、土器、家の面積、水田面積の数値情報を入れてみると、水田面積と家の規模は相関関係があることはわかりました。一方、各家の規模と所有している土器の数のあいだでは相関関係は低い可能性があり、さらに、水田面積と各家が持っている土器の数の相関関係はまったくないという結果がでました。まとめてみますと、カリンガのダンタラン村の土器に社会経済的な要素を見出すことを期待しましたが、土器と他の諸要素である水田面積、家の規模、家族構成員数、土器以外の容器との相関的な関係は何ら存在しませんでした。また、家族が自分たちで使用するために製作した土器は、社会的・経済的局面を反映することがないだけではなく、土器の数量は家の規模や家族構成員数と関連しないだろうということもわかりました。

水田面積と家の規模、家の規模と家族構成員数は相関関係が認められました。ダンタラン村では水田が家の重要な所有物で、経済地位を表す指標になっています。家の規模は、経済地位の指標をもたない考古学遺跡において、経済的局面を復元する上で重要な役割を担うことが確認できました。したがって、家の規模と家族構成員数の明確な相関関係は、考古学遺跡における人口統計学上の資料となり、社会構造を理解し、復元する価値あるモデルにもなると思います。

ダンタラン村では、土器の容積と家族の構成員数との間には相関関係がなく、人口復元、特に家族規模の復元に土器は有効な資料にならないだろうと考えました。カリンガ地域で調理用土器を所有する 50 軒のうち 10 軒が小規模な家屋ですが、実際には小さな調理用土器をたくさん所有しています。これは多くの土器を使う機会があることを示していて、容器の数は家族規模や所得以上に所有者の精神的、歴史的環境に大きく左右されていると考えました。

アリゾナ大学修士課程では、考古学、文化人類学、自然人類学、そして言語学からなる四つのコアコースの単位を取らないといけませんでした。このコースのなかでも言語学のレポートをどうしたらいいのか悩みました。そこで私は、便所の落書きが考古学的な物質資料として使えると考えつきました。アメリカでは世論調査が進んでいて、小さな地区単位でも平均所得は分かっていましたので、公園のある地区に住む人々の所得、落書きの内容、数などを比べるため、所得情報の得られている地区の公衆便所へ行って、壁の落書きをすべてうつしました。その当時、私は結婚していましたので、私が男性便所へ、妻が女性便所へ行って落書きを全部うつしました。残念なことに女性のほうの落書きは分析に手が回らず、男性のものだけを分析しました。皆さんから見ればなんと馬鹿げたことをやっているのだと思われるかもしれません。

その後、日本に帰国して関西大学に復学し、芦屋市のトイレをまわって修士論文を書いたのですが、結果は「可」でした。おそらく、大学院の修士論文で「可」を取る人はほとんどいなかったと思います。考古学の先生からは「むちゃくちゃなことを。いや、これは考古学じゃない」と言われましたが、中世や近世を専門にする先生たちは絶賛してくれました。修士論文をまとめて、『考古学雑誌』という日本の考古学界では一番有名な雑誌の一つに投稿したのですが、ここでも「この論文は考古学ではない」という評価が返ってきました。結局、立教大学が発刊している『物質文化』という雑誌に掲載されました。「現代物質文化の考古学的研究」という大きなタイトルをつけました。旧石器時代研究の方々などからは褒められましたが、日本考古学協会の会誌には、「こんな馬鹿げた人間がいる。これを考古学と呼んでいいものか」と一時物議を醸したことがあります。

話をアメリカの公衆便所の落書きに戻します。ツーソン市では東のほうに所得の高いところが多く、南のほうに低いところが多いのですが、落書きの内容には異性や同性について、そして差別的なものなどが見られました。アリゾナの場合はメキシコと国境が近いので、スパニッシュ系と、チョロと呼ばれる、ちょい悪な若い人たちがいて、そういう人たちの言葉が残されていました。ツーソン市内ではチョロの落書きは西部と南部に多く見られました。結果的には所得の高い地域にある公園には落書きが少なくて、所得が平均的な場所では多いことがわかりました。

芦屋市については所得に関するデータは公表されていたのですが、その他の地域については所得のデータはありませんでした。私はカリンガの調査を通じて、家の規模と水田面積に相関関係があることを知っていましたので、芦屋市でもこれを適用し、家が大きいほど所得が高いだろうと推測して、芦屋市内を海側から山側にかけて歩きました。阪神、JR、阪急の路線が通っている低いところから高いところにいくにしたがって、家の面積が大きくなっていくことがわかったので、芦屋市を高いところから順に第一、第二、第三、第四地域に分けました。そこで見つけた落書きを全部うつし、その数をグラフにすると、やはり第一地域から第四地域にかけて段々と、落書きの数が増えていく様子が見えてきました。

ここまでの話をまとめてみますと、アメリカと日本にある公園内の公衆便所で実施した調査の結果に多くの類似点を見出すことができました。具体的には、所得の高い場所では落書きの数は他の低い地域よりも少なく、落書きの数は社会経済レベルとともに変化すること、中所得層はホモセクシャルの落書きを好むこと、ホモセクシャルの落書きは他の落書きに比べて比較的文が長く、どのような場所でも大便所の空間に書かれていること、低所得者層は異性に関する落書きを好むこと、です。さらに、チョロと暴走族による落書きには、大きな文字で小便所に書かれているという点で共通していました。目立ちたいということですね。字数は少なく、さらに性に関する落書きはあまり見られないのですが、場所、所属名、独自の語法を使用するという特徴がありました。最後に、大学近隣では政治的、文学的な内容が多いことから、落書きの内容は公園を取り囲む環境に影響されていることもわかりました。こうした成果は、発表した当時、考古学のものとは認めてもらえませんでしたが、今日ここにいる皆さんがこれを、考古学と思われる時代になったのかどうか知りたいところです。

帰国後、さらに変わったことをしました。和歌山県寄りにある吉野郡野迫川村という奈良県の村へ行って廃屋を調査しました。考古学を研究している人間は住居址を発掘して、住居址内のモノの情報から、そこに住んでいた人たちのことや、モノの機能や配置のことを復元します。昔から住居址に関する復元のパターンがいろいろつくられたのですが、それが実際に使えるのか、モノが住居址の中の機能を物語ることができるのか、といったことを知りたくて村に協力をいただいて、廃屋を調査しました。最初は廃屋にはモノが少ないと思っていたのですが、夜逃げしたような家にはいっぱいモノがあって、大変な調査になりました。廃屋になるケースには、自然災害、経済的な要因、強制的な移住、さらに精神的に圧迫を受けて出て行くといったことが挙げられます。その中でモノが完全になくなってしまうパターンや、モノを全部残していくパターン、そして片付けをして廃棄していくパターンがありそうでした。さらには、子供が遊びにきたり、泥棒が入ってきたり、そのまま放って置かれたままにされたり、二次的に利用されたりする場合もありました。いろいろなモノが、廃棄されていく過程で存在するということが調査を通じてわかりました。

教員住宅も調査しました。新しい教員住宅ができたので、そこに強制的に移動させられています。そうすると片づけ行為がおこなわれていて、モノが少ないです。川の脇にあって水害にあった家も見つけました。災害のあとに子供の遊び場になっていて、モノがいろいろと動かされていました。そのほかに調査したのは営林署の住宅です。半強制的に廃屋になったのかもしれませんが、ここには子供がいた様子が明らかに残っていました。

経済的な要因で廃屋になった家は、あまり片付けられていませんでした。そこを山林労働者が二次的に使用したり、民具の収集家がやってきたりした痕跡がありました。夜逃げした例もあります。非常にたくさんのモノが、そのまま残っていました。仏壇のなかに並んでいる位牌も見つかって、ちょっとびっくりしました。私たちは懐中電灯を持って中に入るから、余計に怖かったです。

廃屋になる要因のモデルには自然災害、経済、強制、精神的なものの四つが大まかに考えられました。経済的な要因が最も多いのですが、それは家が富んでいる状況と貧しい状況の二つに分かれます。前者は廃棄時に片付けが伴う場合が多く、後者はモノを残して完全に廃棄する場合がありました。ダムの建設などで他所へ移らないといけない強制的なケースでは、片付け行為がおこなわれます。自然災害時にそのまま残す場合と、片付け行為がおこなわれる場合の両方があります。精神的なケースでは差別的なものなどあるのですが、考古学的な検証は困難だろうと思っています。家屋が廃棄されたあとの様相の変化には、放置、二次的な使用、妨害が影響すると思います。

図 1　箸墓古墳のオルソ写真

図 2　箸墓古墳の赤色立体図

パルミラの調査はすでに手掛けていたのですが、パルミラ以外の新しいこととして、アジア航測という測量会社の協力を得て、日本で初めて古墳をレーザー探査し、実際の地形を見ようという試みをしました。まず、羊蹄山とその周辺の航空写真をとり、それから赤色立体地図を作成しました。ふつうの航空写真では羊蹄山にひろがる森林のどこに火口があるかわからないのですが、赤色立体地図であれば羊蹄山の地形だけではなく、木が抜けている様子もわかります。この技術を古墳の調査に利用したいと思ったわけです。

日本で初めて、古墳にライダー（LiDAR）という航空レーザーを照射しました。撮影のために四つのコースを設定し、レーザーを使って 1 m^2 で 10 点計測しました。国土交通省の地図を作るには 1 m^2 1 点でよいところを、それよりも 10 倍高い精度で計測したのですが、まだまだだということがわかりました。

それでもきれいな画像がとれました。オルソという画像はすべての場面を上から見たものです。画像から森林をとりのぞくと、段丘の上に並んでいる、いわゆる陪塚や古墳の段築がきれいに見えることがわかりました。さらに樹相も復元できました。また、もう少し細かくすれば葉っぱの形も見えてくるので、樹種の情報も与えれば復元ができ、生態管理や植物相の管理もできるようになります。

このように大きな古墳でできたので、小さな古墳ではどうかということで、私が勤める橿原考古学研究所の近くにある新沢千塚で、東日本大震災の前日に 30 点計測しました。すると、10 m 弱の小さい古墳でもきれいに見えることがわかりました。航空レーザー計測というのは考古学の遺跡を測量するのに有効であることが確認できたわけです。

次に卑弥呼の墓と言われている箸墓古墳に挑戦しました。このときはレーザーの計測点数を 66 点にして、井桁状に古墳を計測しました（図 1）。後円部に 5 段、前方部に 3 段あります。さらに、古墳の側面にも段があることが初めてわかりました。一番驚いたのは、その設計です。後円部の 3 段目のところと前方部からのびる稜線の高さがしっかりと合っているのです（図 2）。日本の古墳、特に大きな古墳というのは非常に優美に作られていることがご理解いただけると思います。

レーザーは人が立ち入ることができないような森林地帯でも計測できて、遺構をしっかりと理解できます。立地とか、規格、尺度、付帯施設などの研究が、自分で現地に足を運ばなくても、例えば宮内庁が所轄して入れないようなところでも可能になりますし、広範囲の山城でも新しい施設を検出することができるようになります。特に遺構の尺度の規格に関する研究には有効だと思います。また、社会教育的には文化財としての造形物の姿を見せることができますし、文化財保全の観点では遺跡を管理しやすくなると思います。

さて、タイトルにあげたパルミラは後漢書にも登場し、「且蘭」（ショラン）と呼ばれていました。シルクロードの沿線上にひろがる地域を漢、クシャン、ペルシャ、ローマ帝国などが支配し、安定していた時期に栄えました。パルミラは奈良県と同じ緯度に位置していますが、シリアにひろがる砂漠の中央に存在します。1980 年に世界遺産に登録されたパルミラには紀元前 1900 年くらいの遺物が出土する層があり、一応テルと言われているところに神殿があったようです

図 3　C 号墓全景（発掘前、北上方から）

図 4　F 号墓の主室

が、ヘレニズム期の層以降はかなり良い状態で残っています。

交易で非常に栄えたパルミラに、紀元後 240 年ごろゼノビアという女性が現れました。クレオパトラに対して強い尊敬の念を抱いていたゼノビアは、武勇や語学などに関心を持っていました。野心家でもあり、トルコからエジプトまでの地域を支配しました。しかし、それに怒ったローマ皇帝のアウレリウスは、彼女をユーフラテス川の湖畔に追い詰めて捕まえ、ローマへ引っ張っていきました。一連の歴史的な逸話を題材にした歌劇をロッシーニが 19 世紀に生み出しています。

パルミラではベル神殿などヘレニズム期の街並みを見ることができました。それが、IS によってベル神殿も、記念門も、バールシャミン神殿も潰されました。けれども、多くの遺構はまだ残っているといえば、残っているわけです。パルミラには塔墓、地下墓、家屋墓の三つのタイプのお墓があります。こうしたお墓が紀元前 2 世紀くらいから紀元後 3 世紀くらいまで営まれ、最終的には滅びていきます。この 3 タイプのお墓が北墓地、墓の谷、西南墓地、東南墓地の 4 箇所でつくられました。我々は初めに東南墓地にあるお墓の調査を 1990 年から始めました。

我々が C 号墓と呼ぶお墓は、ヤルハイという人物が 109 年に造りました。ここで特筆すべきなのは、彫像です（図 3）。三兄弟のお墓といって、1 人の有翼の女神が死者を天空に運んでいる絵が描かれています。この女神像はシルクロードを渡って、法隆寺などに描かれている天女の絵に変わっていく前の姿を表していると考えています。お墓からヤルハイの肖像と彼の遺骨が見つかっています。50～60 歳の男性で、身長は 170 cm くらいです。

二つ目は F 号墓、ボルハ・ボルパの墓です（図 4）。ボルハ・ボルパは子孫がパルミラの行政長官になっている、かなり有力な家の人物です。お墓はきれいな門構えをしています。パルミラのお墓は家をかたどって造られていますので、一般的に建造碑文には「永遠の家」と書かれています。バッカス神の従者サテュロスの頭部像が、お墓に邪悪なものが入らないように彫られています。ボルハ・ボルパの墓は 220 年と 224 年に売られ、譲渡されました。このお墓の奥の石棺が盗掘を受けて、一部、肖像の頭が持ち去られていました。この墓は、奈良県が 1990 年から 2000 年まで経費を出してくれて調査することができました。調査の最後には、観光客のために見ていただこうと修復をしました。シリア政府から発掘許可を得るときに出された条件の一つに、よい資料が見つかった時に修復するようにと言われていたのです。この墓は 2011 年 9 月に埋め戻したのですが、その後どういう状況になっているのかわかりません。

一番古いヘレニズム期のお墓も調査しました。穴の中に納めた木棺と天井石をもつお墓で、紀元前 4 世紀から紀元前 2 世紀くらいのものです。板を止めるために釘が曲げられています。被葬者は男性ですが、印章付きの指輪やネックレスが副葬されていました。さらに、靴の横に付けて、馬を蹴るときに使う拍車も出ています。男性を被葬者とする地下墓の場合、副葬品が出てくることはほとんどありません。しかし、一つ古い段階には副葬品がたくさん出てくる事例が知られていますので、パルミラで単葬墓から家族墓に変わっていく段階で、葬制、つまり埋葬の形式や副葬品の入れ方が変わっていったのだと思われます。

H 号墓という墓は 113 年にタイボールという名の人物が造ったもので、何度も譲渡されています。家族が宴会を開いているシーンが彫られているのですが、珍しいことに肖像の頭が全部残っていました。パルミラではこの墓だけでも、非常に貴重な発見でした。し

図5　129-b 号墓全景（発掘前、北方から）

図6　129-b 号墓を三次元計測する様子

かし、ここも紛争のさなか盗掘によって頭が全部もぎ取られ、持ち去られました。H 号墓は住友財団からお金をいただいて、発掘調査後の雰囲気を維持するように修復し、三次元スキャナーで撮影しました。発掘したときのプランの図面はあったのですが、修復したあとの図面をとっていなかったので、図面の代わりに三次元の記録をとりました。地下墓の構築プランと比較しやすいという点でも、三次元スキャナーは有効でした。このころ日本でもまだ三次元スキャナーを使って、遺構をスキャニングすることはあまりやられていませんでした。

次に、パルミラ博物館の近所に位置する家の形をした家屋墓（129-b 号墓）を発掘しました（図5）。たぶん地震で崩れたと考えられるお墓を三次元スキャナーで記録し、クレーンで一つずつ石のブロックを取り上げ、並べました（図6）。さらに発掘を進めると、階段のところから1歳未満の乳児を埋葬したお墓がたくさん出てきました。家屋墓とは直接関係はありませんが、パルミラが滅びた後、ササン朝の影響が及ぶ前、3世紀の終わりくらいにローマによって、この家屋墓周辺に城壁が造られるのですが、その工事の安全祈願か、あるいは勝利祈願のために乳児のお墓が設けられたと思っています。この時代は出生率が非常に低いので、わざわざ生贄にしたわけではないでしょう。三次元スキャナーを使って、並べた石を1点1点記録し、復元を試みていますが、紛争のため調査がまだ終わっていません。

ちょっと変わった私のパルミラ研究を紹介します。一つは、男性のお墓は副葬品を持たないと言いましたけど、若い女性に限って多くの副葬品が入れられます。装身具、ガラス容器、紡錘車、化粧道具などがありますが、そのようなモノの中に、ヒツジやヤギの中手骨が含まれていました。中手骨は4本副葬されていました。当初は、中手骨が何の為に副葬されていたのか、全くわかりませんでした。しかし、パルミラの街をぶらぶら歩いていると、女性が使っていた地機の力のかかるところに中手骨が使われているのを見つけました。彼女はそれを50年以上使っていて、家にその中手骨が伝わってきていたというのです。おそらく中手骨は女性による労働のシンボル的なモノの一つで、歴代の女性に伝わってきたのでしょう。こういう事例に基づいて、発掘品から労働のシンボル的な様相が復元できるのではないかと思っています。筑波大が調査したテル・エル・ケルク（Tell el-Kerkh）遺跡ではウシの中手骨が見つかっていて、同大学の常木晃先生は、私の考えを参考にしてくださり、縄やロープを作るために使ったのではないかと仰っています。

死者について考えるために、先ほどお見せしたヤルハイの頭骨を使って復顔をしてみました。職人が死者の彫像を作るときに、手本のようなものを使っていたのか知るために、またパルミラの人の顔は復顔されていませんでしたから、復顔したいと思いました。彫像の顔は少し痩せており、若作りしていると思います。少し顎が出て、頭がちょっと大きめです。ヤルハイの頭骨そのものはパルミラで見つかっているものと比べて大きく、前後にも長いです。下顎骨も少し鰓状に張っていて、歯の摩耗が激しい。眼窩の間も少し広めで、へこんでいる度合いが大きい。おそらく高い鼻を持っていたのでしょう。

ロシアの科学アカデミーに行って復顔してもらうことにしました。成果を比較するために、国立科学博物館から紹介してもらった翁譲さんのところにも持って行って復顔してもらいました。翁さんは、池上本門寺の狩野派のお墓から出てきた狩野養信という人の骨から復顔をしています。後に見つかった狩野養信のいとこの写真と、非常によく似ていたのでその腕前は信用できると思いました。翁さんが復顔したものは端正で優しい印象です。この二つの顔を重ねると同じように見え、基本的にはよく似ていると思っています。結論としては、たぶん生前に描いた絵のような手本があっ

て、ちょっと若返らせたようなかたちで彫像をつくったと考えています。

パルミラの西南墓地にある壁画を描いた集団がいたことは確かです。マンチェスター大学で、エジプトの2世紀ころの人骨から復顔したものと描いた絵を比べているのですが、よく似ているものがあります。パルミラにも画家が存在していて、死者が出たときとか死ぬ前に手本を渡して彫像をつくっていたのでしょう。

次に、紛争が始まってパルミラに行けなくなっても、世界に散らばっているパルミラの彫像を使って、工人たちの姿を浮き彫りにできないかと考えました。さらに、世界各国に流出したパルミラの彫像のデータを、パルミラ博物館ないしはシリアに戻したいと考えました。データから顔の特徴を抽出して比較するために、人間の顔、人類学的特徴のあるポイントと彫像に同じ基準線を設けて、計測しました。

H号墓から出土した彫像の輪郭の特徴をおさえて、他のものと比較してみますと顔が違って見えますが、目や他の部位、その角度が正面でも横でも同じ位置で重なります。三次元のデータは、同じような角度で揃えて比較ができるので便利です。レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた構成図にも、やはり同じような形で線が引かれていますが、こうした技法はおそらくギリシャからパルミラに伝わったのでしょう。ただし、いかんせんまだ研究をそれ以上進めていませんので、これから進めていきたいと思っています。

面白い漫画みたいな話があります。パルミラの129-b号墓から布に包まれた銀貨が7枚出土しました。これは1500年ころからオランダで作られた30gくらいのライオン・ダールダー銀貨です。オランダで作られ、パルミラから出土したこの銀貨は1597年に作られたことがわかっています。コインの裏にはライオンが描かれています。一応オランダの国立銀行へ行って、銀行が所有している同じ種類のコインを見せてもらいましたが、非常に劣化していて、われわれが見つけたコインのほうが状態の良いことがわかりました。しかしISが入ってきたため、残念ながらあの銀貨が今どうなっているかわかりません。

アムステルダム大学の博物館にある絵を、私が129号墓から撮った写真と見比べてみると、よく似ていました。オランダの画家エッセンという人がイギリス商人のパルミラ遠征隊に同行したときに、描いた絵です。この絵は色々なところに寄贈され、色々な人を経由して大学に辿りつきました。大学では大事にされていて、今はアラード・ピアソン博物館に飾られています。

約30名からなる遠征隊は1691年9月21日にアレッポを出発して、10月4日から4日間パルミラに滞在し、またアレッポに戻ってきています。おそらくこのエッセンがパルミラのパノラマを描こうとしたときに、129号墓の柱の上にのったのでしょう。そこで絵の構図を考えていたときに持っていた布包みを7枚のライオン・ダールダーコインごと落としたのではないでしょうか。

さて、これから悲惨な話になるのですが、2011年に紛争が始まって以降のシリア、パルミラを紹介します。パルミラの象徴ともいえるライオン像は、ワルシャワ大学がアラート神殿から発掘したものです。2011年に博物館も強奪される恐れがあったため、窓とか扉に二重の鉄扉をつけたり、鉄板を置いて中に砂を入れたりするなどして、博物館を守る作業が進められました。さらに私たちが調査したお墓は二重扉にして砂で埋めていきました。しかし、ISが来る前に、現地の人たちが政府軍と非政府軍に分かれて、このお墓を境にして戦うことになってしまって、政府軍はここに入ることができなくなり、その間に地元の人たちが盗掘をしてしまい、お墓にあった彫像も壊されたり、持ち去られたりしました。

われわれとシリアの古物博物館総局にはパルミラ博物館にフィールド・ミュージアムをつくる計画があって、発掘した資料を全て元に戻すことを考えていました。特に彫像はパルミラ博物館の収蔵庫にはいっぱいありました。だから、発掘して収蔵庫に収めるよりは、修復して遺跡に戻せるものは戻す計画があったのですが、結局は修復することによって宝の山がどこにあるのか教えてしまうことになるという皮肉な結果となってしまいました。

幸いこれらの彫像は三次元計測をしていましたので、本物と寸分違わないものを復元して作ることができます。大塚オーミ陶業という会社が本物と寸分と変わらない陶製の弘法大師像を作っています。今は新しく石の粉を使って3Dプリンタで出力した彫像もできるようになりましたので、紛争がおさまればまた復元した彫像を作って、遺構に戻すことができます。その日を楽しみにしています。私が死ぬのが早いか、シリアの平和が訪れるのが早いのかわかりませんが、後世の人に託したいと思っています。

2015年にISが侵攻してきて、若い人たちが十何人も処刑されました。また、私にとってパルミラのお父さんのような存在だったハーリド・アスアド（Khaled al-Asaad）も斬殺されてしまいました。博物館にあったライオン像も破壊されたことが、2016年にワルシャワ大学とシリアの古物博物館総局の仲間たちが現地に行ったときに確認されました。この像はダマスカスへ運ばれて、そこで復元され、ダマスカス博物館の前庭に展示されています。バールシャミン神殿、ベル神殿、塔墓も爆破されました。公開されている写真を見ると東方の人々も混じっているのが、衣装

から伺えます。その人たちも加わり、爆弾が神殿内に運ばれ、いたるところに並べられ、爆破されたために、大きな建物址は全て粉々になってしまいました。

そういうことが起こってから、2015年にちょうど私が日本西アジア考古学会の会長の任についていたので、学会員の皆さんにもたくさんご協力いただき、シリアで発掘調査していた外国隊の隊長とシリア人の考古学関係者を招待して、シリアを勇気づけるための国際会議をベイルートで、12月3日から6日の4日間開きました。その経費は会員や一般市民の方々にチラシを配送するなどして集めた寄付金から出すことができました。さらに、文化庁も海外での活動を助成する補助金の募集をしていたので、そこに申請しました。その結果、ベイルートで学会を開くことができました。写真家の吉竹めぐみさんは、パルミラ郊外でベドウィンを取材して制作した写真集を快く寄贈してくれました。自費出版されたものなのですが、寄付をしてくださった方々にお配りさせていただきました。

さらにもう一つ、シリア側で資材が足りていなかったため、そのための寄付も集めました。ちょうど紛争が激しくなりつつあるなか、シリアの博物館では収蔵品を隠す必要がありました。収蔵品はウレタンに直接入れて保管していたのですが、ウレタンは土器などにへばり付いて劣化するとよくないので、西アジア考古学会によって譲渡された薄葉という紙で包んで保管してもらうことにしました。ベイルートの学会では日本隊の皆さんも参加してくれて、大盛況でした。ベイルートからシリアに戻っていくシリア人を勇気づけられたと思います。また、会には紛争を逃れてヨーロッパなどに避難していたシリア人たちも来てくれて、シリアに残ったシリア人とのわだかまりも少しは解消できたと思います。

2016年の4月に一度解放されたパルミラを、ワルシャワ大学と古物博物館総局のメンバーが訪れています。町も博物館も悲惨な状況でした。ISは彫像を割って博物館の倉庫にいっぱい入れたり、バリケードを作ろうと窓側にたくさんの石を並べたりしました。短期間でしたが、ワルシャワ大学の仲間たちが頑張って掃除して、古物博物館総局とも協力して彫像をできるだけまとめてくれました。彫像はあとでダマスカスに運ばれています。2015年の8月31日に破壊されたベル神殿は、2016年に解放されたときに破壊された全容がわかりました。記念門も破壊されました。解放祝いにロシアの楽団が来て、プーチンがビデオで挨拶をしているのですが。

一時解放されたパルミラをISが再占拠しました。劇場や四面門というテトラピロンはこのときに破壊されてしまいました。私たちが調査した西南墓地の三兄弟の墓は、ISが壁画を塗りつぶして、地下の事務所にしていました。ベル神殿は破壊されましたが、2010年にシリア側から三次元計測してほしいと言われていました。われわれも帰る日が間近だったので、本当に簡単に計測しました。一応、三次元画像を作成することができました。さらに、（株）アコードが作成してくれた三次元データを、NHKとタニスタというグラフィック会社に依頼して、三次元計測した画像にさまざまなところから入手した写真を貼り付けた結果、ぼやけていた箇所の文様が見えるようになりました。そして、世界で唯一の資料となったベル神殿のデータをシリア側にも渡しました。これ以上の写真データをわれわれは持っていないので、スイスの工科大学にデータを渡して、足りない箇所を補完してもらっています。

ベイルートで会議を開いたおかげで、日本の外務省がわれわれの活動や日本西アジア考古学会の活動、さらには個人的にやっている活動に着目してくれました。外交的な関係が途絶えてしまったので、日本政府は直接支援をできません。それで国連開発機構（UNDP）による人材育成プログラムに日本が出資し、橿原考古学研究所が委託を受ける形で、シリア文化財関係者の育成事業を今進めています。

そのキックオフイベントとしてパルミラに関する国際会議を開きました。橿原考古学研究所所長の青柳正規先生や漫画家のヤマザキマリさんも参加しました。東京外大の黒木先生にはコーディネーターを務めてもらいました。シリア人の方の発表、さらにはハーリド・アスアドの長男のワリド・アスアドがビデオで発表してくれました。最終的に報告書にまとめています。

キックオフイベントのあとに、実際に研修をおこなうことになりました。資料の記録化、修復保存、さらには探査、分析、展示公開という五つの分野で様々な大学機関や研究機関などに協力をいただきました。36人のシリア人を長い期間では3カ月、短い期間では2週間招聘しました。資料の記録化では、三次元計測、拓本、測量などの研修をいろいろとおこない、中部大学の渡部展也先生にはGISによる位置情報やドローン、筑波大学の松原康介先生には建造物の被害状況調査を担当してもらいました（図7）。また、国会図書館では紙書籍の修復、元興寺文化財研究所では文化財の保存と修復研修をおこないました。元興寺文化財研究所には、石造の橋を実際に現地で修復してもらいました。奈良県の文化財保存事務所には、薬師寺の心柱を見学し、その修復の様子も見てもらいました。立命館の山崎正史先生には防火システムの検証、早稲田大学の城倉正祥先生や馬場匡浩先生には古墳の地中探査、帝京大学では金属器の分析、古代オリエント博物館では展示公開の研修をしてもらいました。日本ばかりではなくて、ワルシャワ大学でも石像修復の研修をしてもらっています。研修の最後には修了証書を渡し

図 7　UNDP シリア人文化財関係者人材育成事業による文化財の記録化研修（3D スキャナー（ATOS））

ました。

2020 年と 2021 年には、ポーランド人修復家（Bartosz Marikowski 等）にダマスカスに行ってもらって、彼らがパルミラの彫像を使って保存修復の研修をおこないました（図 8）。この研修成果の展示を、橿原考古学研究所附属博物館と古代オリエント博物館で、2022 年の 1 月と 2 月に展示しました。本当は彫像を日本に持ってくる予定だったのですが、なかなかうまくいかず、持ってくることができなかったので、全部映像を使って展示をしました。

パルミラに「エフカの泉」という泉があります。われわれが調査を始めてしばらく経って、1995 年くらいからここの泉の水はなくなっていました。パルミラでは地元の人々がお金を儲けると、土地を買って耕します。パルミラの町の西側にホムスというところがあるのですが、そこへ行く道に沿って農園を買って、農作物に水をやるためにポンプアップをします。その水量が、地下水の容量を超えてしまって、「エフカの泉」はなくなってしまったのです。ところが、シリアで紛争が起きて農園で誰も作業しなくなると、水が戻ってきたというのです。これはちょっといい話です。今、人は徐々にパルミラに戻ってきています。電気も復旧していますし、建物も元に戻ってきています。何よりも子どもたちが遺跡の中を闊歩して遊び、農園に生えているオリーブの木の上でニコニコしていました。こ

図 8　UNDP シリア人文化財関係者人材育成事業で修復したパルミラの少年胸像

ういう様子が少しずつ戻ってきたことはよかったのかなと思っています。早く紛争そのものが終わればいいと思います。

私は五十数年仕事してきましたが、そろそろどういうふうに考古学にきりをつけていくのかと自分なりにいろいろ考えるところはあります。とはいっても日々頼まれごともあり、バハレーンでも調査をしています。パルミラの隊商たちが、おそらくバハレーンを中継地としてインドに行っていたことは確かなのです。さらに、バハレーンの知事にパルミラ人がなっていたこともパルミラから出土した碑文に載っています。パルミラ人のお墓を見つけるために、バハレーンの古墳の発掘調査をしています。これもなかなか難しい話ですが、少しでもパルミラにかかわることができればと思いながら、研究をもう少し続けてみようと思っています。

雑多な話でしたけれども、今日はどうもありがとうございました。